
神月のアキ

雨霧ユウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神月のアキ

【Nコード】

N7276H

【作者名】

雨霧ユウ

【あらすじ】

自分たちが神となる為に集う秘密結社『月命機関』の二番目の
暦、神月のアキは、運命が成すままに闇を狩っていた。そこで出逢
うのは、荊の姫君。そこで出会うのは、光の組織『神ノ騎士団』。
それらの出会いに、アキは自分の存在の意味を疑うようになる。
。 。
ダークでラブなファンタジー第一章。

序曲 闇と運命の共鳴

とある夜の海岸での出来事。

空に浮かぶ満月の光に照らされた、果てしなく続く海を砂浜から見ている男がいる。波を打つ音すら聞こえない無音の空間に彼は存在した。

漆黒のローブに身を包み、目深に被ったフードで顔は見えなかった。

ふと砂地を歩く音が聴こえてくる。それは次第に大きくなってきて、こちらに近づいてきていることを理解する。そして、その音が彼の真後ろで止まったと同時に、彼は言葉を紡いだ。

「見よ……二番目の暦裁月よ。我らが月は、今日も我らを見下ろしている」

彼は手を空に浮かぶ月へと向けた。怪しげな光りを放つ月に、心を奪われると同時に、憎しみさえ抱いていた。

「遙か高見から全てを見下すあの座は、それは優雅であろう」

手の中に収まった月を勢い良く握りつぶす。

「が、それもここまでだ。その座、神の座は我ら月の使徒のものだ」 そう言い、後ろを振り返り、漆黒のローブの男 裁月と

向かい合い、裁月へと手を差し向け、その手のひらを空へと向ける。

すると、手のひらから眩しい光が溢れ出て、一つの光線となって天へと注がれていった。闇夜を切り裂いた光線を中心に、一二個の光の玉が浮かび上がった。それは一つを除いて、左から数えて一二番目を除いて、全て黄金の輝きを放っていた。

光の玉の一二目だけが、淡い白色の光を弱々しく放っている。

「これは、我ら月命機関の人数を表す。一の曆から一一の曆までは埋まっている。だが 最後の一つ、一二番目の曆、神月だけが空席のままだ」

光線の周りに浮かぶ光の玉が、一二番目だけを残して、音を立てて金色の煙となっていく、やがて直ぐに消え去った。

「我らは二人揃って初めて一つの機関となる。言い換えれば、神月がいなければ神へと続く道は現れん、ということだ」

一つ残された一二番目の玉が、ゆらゆらと動き出し、裁月の前で止まる。

「裁月よ。神月を捜し出すのだ。もうこの世に産み落とされているだろう。それがお前の、いや、我らの使命だ」

冥月から差し出された一二番目の玉を、裁月は右手で丁寧に掴み取り、冥月に軽く一礼をし、静かなる海へと背を向け、闇の奥へと姿を投じた。

一人、この静寂の空間に残された冥月は、忍び笑いをこらえながら未来への希望を口に出す。

「これでやっと……この世界を、愚かなる人間共の手から取り戻せる。くく、まだ見たこともない神月よ、期待しているぞ」

そう言い残すと、冥月は、自分の姿を灰色の煙へと変え、この場から去っていた。

月は、全ての者の願い、未来を知っていた。これから生まれゆく神月の運命をも。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7276h/>

神月のアキ

2010年10月21日23時57分発行